

『トゥールの司祭』小考

—神父ビロトーの栄光と悲慘を象るもの—

柏木隆雄

バルザックが1832年に発表した『トゥールの司祭』*Le Curé de Tours* には、三人の司祭が登場する。シャプルゥ神父 *l'abbé Chapeloud* とビロトー神父 *l'abbé Birotteau*, それにツルッペール神父 *l'abbé Troubert* である。

この小説の題に用いられた「トゥールの司祭」は、トゥールの町の司祭全体にかかわる、いわば司祭職そのもののあり方を意味するものと考えても良い。しかし或いはある特定の司祭、すなわち上に挙げた三人の神父達のうちのいずれかを指す、と読むこともできる。むしろバルザックの小説の読者としては、後者の考えがより一般的であろう²。

では≪トゥールの司祭≫とは誰を意味するのか。この問いを解くことは、とりもなおさず小説『トゥールの司祭』そのものの意味を解き明すことでもある。なぜならこの作品は、発表された当初、『独身者達』*les Célibataires* と題されていたのであり、1843年、作者の意を最もよく表わしたとされるフルヌ版 (éd. Furne) 全集において初めて現行の題が付けられたいきさつがあるからである。

もともと『独身者達』という表題が付けられたのは、三人の神父をはじめ、登場人物の殆ど全部が独り者か未亡人、あるいは配偶者の有無の判らぬ者達ばかりであることから由来するのであろう³。この題名はそのまま1839年 Charpentier から出版された『地方生活情景』*Scènes de la vie de province* の第一巻に収められる時まで踏襲される。ところが、1843年、前年に発表された『ラ・ラビューズ』*la Rabouilleuse* と、1839年の『ピエレット』*Pierrette* をあわせて三部作としてフルヌ版『人間喜劇』の『地方生活情景』第二巻に再録された、この時はじめて『トゥールの司祭』と名づけられたのである⁴。『独身者達』というタイトルは、そのため顧みられなくなったわけではなく、新たに、その三部作の総題として、より大きな意味を持つに至った。実際三部作のいずれも、独身のままに中・老年を迎えた人物をめぐって、地方に棲息する人間達の虚栄と欲望のドラマをそのまま骨格とする。

バルザックの『人間喜劇』の構想の円熟した後に、新しく『独身者達』から改題された『トゥールの司祭』が誰であるかという問いは、従って、ただ小説の意味それだけにとどまらず、バルザックの『人間喜劇』の構造を解く糸口、すくなくとも『地方生活情景』の成り立ちに重要な示唆を与える出発点の役割りをも果たであろう。

I

もとより、この小説が

1826年の秋の始めの頃、この物語の主要人物たるピロトー神父は、思いがけぬ驟雨に降り込められる憂き目にあった。ちょうど夜会を過ぎた屋敷からの帰り道のことである。

(p. 181)⁵

と書き始められているのを読めば、ピロトー神父が「この物語の主要人物」principal personage とされていることに疑問の余地はないように思われる⁶。けれども、ことがらは必ずしもそう簡単ではない。物語の展開につれて、登場人物のそれぞれ、ピロトー神父の庇護者リストメール夫人 Mme de Listomère や、彼の寄宿する家の女主人ガマール嬢 Mlle Gamard など精彩をもって描き出されてくると、それまで存在感の薄かったツルッペール神父が、俄かに強烈な個性を発揮して、この小説の舞台全体を圧倒する勢いを示すに至るからである。

ピロトーの親友で、教会参事会員 chanoine の職にあったシャブルッ神父は、老嬢ガマールの二階部屋の先住者であるが、彼は物語の始まった時には既に死んでしまっている。したがってこの人物は問題とならないようである。けれどもピロトーが、ガマール嬢やツルッペール神父から手酷く蒙る災厄の、実は、直接、間接の原因であって、ピロトーの亡友シャブルッ師もまた、いわば大きな影のように、『トゥールの司祭』の物語の背後に横たわっているのである。

これら三人の神父について、それぞれどのような位置づけがなされているだろうか。テキストに従いながら以下に検討してみよう。

シャブルッ神父も、その友ピロトーも金持ではなかった。二人共百姓の悴で、司祭職にあてがわれるほんの僅かの報酬があるばかりで、しかも彼等が雀の泪ほど貯めあげたものさえ、革命の不幸な時期を凌ぐのに使ってしまった。ナポレオンが再びカトリックの信仰を回復した際、シャブルッ神父は、サン・ガシアン聖堂の教会参事会員に任命され、ピロトーは聖堂の助祭となった。

(p. 184)

これが、シャブルッとピロトーについて、作者が紹介している彼等の履歴である。

一方ツルッペール神父については、その出自は明らかにされていない。彼はピロトーと同様の助祭 vicaire で、シャブルッ神父の階下に下宿している。何年程前からガマール嬢の下宿人となったかも明らかでない。以下に示す彼についての最初の言及が、ツルッペールという人物の一つの性格を表わすものであろう。

ツルッペール師については、この信心家のガマール嬢は、まったくその名を口にのせることはなかった。完全に彼女の生活の運動に入り込んでしまって、さながら惑星の軌道をめぐる衛星の如きものであったから、ツルッペールは、この女にとって、つきあっている人間個々と、周りにいる犬共の類との中間的な存在であったのである。(p. 194)

老嬢にほとんど人間並みの注意をひいて貰えず、ひたすら彼女の意を迎えることを旨としているツルッペールに較べれば、シャプルゥは、参事会員という役職もあり、ガマール家で最上の部屋に陣取って十二年もの間、如才なく家主である老嬢の気質をわきまえて、しかも結局は、自分の思うままの世話を彼女から受けてめでたく生を終える。

シャプルゥの後を襲うピロトー神父も、最初の半年は、亡友とほぼ同等の幸福を味わうことができた。けれどもそれは長続きしない。ピロトーを道具に、町の社交界の一方の旗頭におさまろうとする老嬢の野望を我知らず挫いてしまった老神父は、彼女から惨々に苛まれたあげく、天国と思い定めていた下宿を追い出される。しかも年来の希望であった参事会員の椅子は、他人に横取りされてしまうのである。

シャプルゥの死後、階下のツルッペールは、ガマール嬢と結び、次第にその隠忍自重の仮面を捨て、苛責ない報復を、彼を逼塞させていたシャプルゥ本人にではなく、彼の後釜として入ったピロトーに加える。彼はやがて教会の司教総代理となり、物語の最後に至っては、トロワの司教となりおおせて野望を遂げる。

以上が、《トゥールの司祭》達の興亡の物語である。三者三様の運命の相違がそこにたどれるであろう。しかし、このことは必ずしも、我々が最初に提出した問いに直接答えるものではない。むしろ上に示した運命を背負う神父達を、作者がどのように描いているかを見ることが重要と思われる。それを明らかにすることによって各人物のこの小説における比重が測れるからである。

その意味で、最も興味深い事実を示しているものとして、それぞれ三人の司祭を叙述する際の形容詞の用い方をあげたい。一見見過されがちだが、よく注意して比較してみると、作者の周到な配慮がそこにかがえるのである。

まずシャプルゥ神父についての形容を取りあげてみよう。

何年もの間に、シャプルゥ師は、その部屋を祈禱室に仕立て上げ、彼の信者の女達は喜んで飾り立てた。さらに後になって、一人の婦人が、この参事会員の部屋にといつて、綴れ織りをあしらった家具を献じたが、それは彼女が手ずからこの好ましげな男の目の前で作っていたものなのである。(p. 185)

「この好ましげな男」*Cet homme aimable* とある、これがシャプルゥ神父を修飾する最初の形容詞である。そして続いて彼について述べられる言葉にも、*aimable* という形容詞が用いられる。

自分本位であるが、好ましい、かつ鷹揚な人物であるシャプルゥ神父 (p. 186)

aimable は更に「鷹揚な」*indulgent* という形容が付け加わる。しかし「自分本位」*égoïste* なのである。この *égoïste* という言葉は、シャプルゥを描く次の個処で、「やり手で気のきくエゴイスト」(p. 192) という表現でまた用いられている。「やり手で気のきく」と訳したのは *adroit et spirituel* の語である。

老嬢ガマールの二階に寄宿するようになったシャプルゥ神父は、「賢しく (*sagement*) 自分の振舞いを計算した」(p. 193) と述べられ、「抜け目のない参事会員 *le rusé chanoine*」(p. 193) が彼を修飾する最後の形容詞となっている。

つまりシャプルゥを描く形容は、*aimable, égoïste, aimable et indulgent* さらに *égoïste adroit et spirituel* そして *rusé* と変っていることになる。この変化が、きわめて意識的な筆の所為であることは、形容詞の微妙な繰り返しと発展から容易に理解されよう。そこには、シャプルゥという人物の人当りの良さと、その底にある計算高い巧緻な性格が、教区の婦人達を中心とする歓待へと結びつく図式が、はっきり読み取れる仕組みになっているのである。

次にツルッペール神父について見てみよう。彼について最初に語られるのは、先に引用した、ガマール嬢の眼を通して見られる「つきあっている人間個々と、周りにいる犬共の類との中間的な存在」*intermédiaire entre les individus de l'espèce humaine et ceux de l'espèce canine* (p. 194) の姿である。これはツルッペールを描く次の場面にもそのまま受け継がれて「忠実で辛抱強いツルッペール神父」*le fidèle et patient abbé Troubert* (p. 196) が定着する。この辛抱強い *patient* 性格は、本文198頁でも強調されるが、その奥に何が隠されているかは、機微に長けたシャプルゥの眼に見えぬことはない。

こうした常に変らぬ忍従の様 (*cette constante soumission*) も、生前の参事会員の意見を変えることはできなかった。彼は散歩の折にも、なおピロトーにこう言い聞かせたものである。「気をつけなくてはいけないよ。あの痩せ男のツルッペールを、彼奴は教皇シクストス五世をそのまま司教に縮めたような人物なのだ。」 (p. 202)

ツルッペールを指して「あの痩せ男」*ce grand sec* と言うのは、*sec* が乾ききった皮肉な、人物という裏の意味をも籠めていて興味深い。しかもそれが *grand* なのである。こういうツルッペールの物腰の中に、教会の人々も、当然、野心のほのみえるのに気がついている。

従ってツルッペールの野心ありげな様子は、彼を畏れさせることにもなって、おそらくは、そのために平の参事会員として取るに足らぬ役割りをあてがわれる羽目にもなった。 (p. 201)

辛抱強い司祭は、同時に野心家の風貌 *l'air ambitieux* も持つのである。サン・ガシアン聖堂の廊下を歩く彼は、「背の高い参事会員」*le haut chanoine* と形容されるが、同じ背の高さを表わすに *grand* とせず、*haut* としたところに、ツルッペールの単なる長身でなく、とり澄ました傲岸な印象を示す作者の意図を見ることができる。

しかしシャプルゥの後に移ってきたピロトー神父に対して、ツルッペールはやはり「腰の低い僧」*l' humble prêtre*(p. 202) の姿勢を崩さない。彼がその「辛辣で冷やかなせせら笑い」*le sourire amer et sardonique* (p. 205) を唇に浮べ始めるのは、ガマール嬢が、ピロトー神父に対して公然と宣戦を布告してからである。このあたりから、にわかにはツルッペールの描写が変化を見せてくる。

ガマール嬢の思いもかけない執拗な攻撃に動転したピロトーが、仲立ちに頼もうと駆け込んだツルッペールは、「人を圧倒するような参事会員」*l'imposant chanoine* (p. 212) であり、その様子は「重々しくて冷やか」*d'un air grave et froid* (p. 212) であった。最初の卑屈で従順な僧の印象とは逆に、「何か腹の底の知れぬ神父」*prêtre mystérieux* (p. 213) としての性格をいよいよはっきりさせてくるのである。

老獪明敏な地方人の権化ともいうべきブルボンヌ氏 *Monsieur Bourbonne* さえ

ツルッペール神父は、あれでなかなか深い考えの持ち主だから、そう手っ取り早く腹を見透かされるような手合いじゃない。 (p. 216)⁷

とリストメール家に集まる人々に警告するが、この言葉は、念願の参事会員にも成りそこね、ガマール嬢の下宿を詐欺同様に追い出されたピロトーの思わず口に出す

あの男は怪物です！ (p. 223)

の叫びをまっぴらに始めて真の重みを持つに至る。かつて人間と家畜との中間と見なされ、上流の社交界から締め出しをくっていた存在が、今や怪物 *monstre* と成っているのである。

もちろんツルッペールは、ピロトーのように声高に騒ぎ立てるわけではない。相変わらず「寡黙な神父ツルッペール」*silencieux abbé Troubert* (p. 226) である。その底知れぬ人格の秘密は、やがてリストメール夫人の甥の男爵が海軍での昇進を邪魔するものがあると知らされて急遽パリへ駆け合いに出かけた際明らかとなる。ツルッペール神父は、王政復古当時、政治の裏面で想像以上の勢力を誇った修道会 *Congrégation* の一員だったのである。ブルボンヌ氏は、これを「あの坊主の目には見えない影響力」*l'invisible influence de ce prêtre*(p.233) と称した。目に見えぬ影響力は、すなわちその及ぶ範囲のかえって極まりないことを示す。ツルッペールは、ますます怪物的な巨大さをまして、遂にトロワ *Troyes* の司教イアサント閣下 *M^{sr} Hyacinthe* と成り、ピロトーを粉砕してしまうのである。

ツルッペールは、ピロトーの眼には、エジプトのピラミッドほどの巨大さを持つに至った。この男の手はパリに届き、その肘は、サン・ガシヤンの僧坊にある。 (p. 236)

fidèle et patient から始って、*ambitieux, imposant*, そして *mystérieux, monstre* と、ツルッペールを形容してきた筆は、この神父の途方もない大きさをまざまざと示す「ピラミッドほどの巨大さ」*les dimensions d'une pyramide d'Egypte* をもって終る。先に見たシャブルック神父と同様、彼の描写の変化の相が明らかに見てとれるであろう。しかもその振幅の度合いが大きいだけに、いっそうツルッペールの怪僧たることが浮き彫りにされるのである。

では、いま一人の神父ピロトーについてはどうであろうか。物語の冒頭紹介される彼の肖像は以下の如くである。

ピロトー神父は、小柄のずんぐりした男である。卒中持ちの体質で、年はかれこれ六

十歳になるが、もう既に痛風に幾度か苦しんだ経験がある。ところで人生には、つまらないことながらかえって鬱陶しく嫌なものがあるが、この人の良い僧が一番嫌がるのは、幅広の銀の留金のついた靴に突然水がかかったり、その革底が水に浸ることであった。

(p. 181)

ピロトーは、まず「人の良い僧」*le bon prêtre* と示されている。小柄で太った老神父の人となりだが、人生の瑣事に気をとられるエピソードを挿入することで、人格の大きさは感じられないが、その人柄の良さが強く印象づけられる。そして雨の止むのを待ちながら、年来の願望である参事会員の椅子がころがりこんでくる夢を反芻する彼の姿に、あまりものごとを深く考えない、楽天的な人の良さが写し出される。実際、次にピロトーを表わすのに *le bon homme* という語が使われているのである。(p. 182)

驚くべきことは、この「善良な」*bon* という語が、後に述べる「哀れな」*pauvre* という語とともに、以後のピロトー神父を叙する、ほとんど唯一の形容詞であるということである。いちいちその個所を引用する煩を避けるが、*le bon prêtre*, *le bonhomme* のほかに、*le bon Birotteau* といった表現が、*l'abbé Birotteau* と書くべきところに用いられている。時には、その「人の良さ」を「馬鹿とまで言いたいほどのもの」*la bonté allait jusqu'à la bêtise* (p. 192) と強調し、「大きな子供とも言える」(p. 192) し、また「卒直で、不器用なエゴイスト」*un franc et maladroit égoïste* (p. 192) であるとするが、その根本において、結局はそれらも「実に羊さなからの性質」*très mouton de sa nature* (p. 198) という言葉に代表される「人の良さ」を示すものでしかないだろう。

その *bon* とともに、ピロトーにいまひとつ *pauvre* という形容詞がしばしば用いられることを付け加えておかななくてはならない。この「哀れな」という形容は、たとえば、

これほど棘をさすようなやり方で、この家の女主人から、彼の期待していた弁解の言葉もなく扱われて啞然とし、いやそれどころかおどおどしてしまって、というのも内気な人間というものは、何か議論しなければならぬ羽目になりそうだと感じると、とりわけ当の自分がその槍玉にあがる場合にはそうなのだが、この哀れな助祭は、ものも言えずに座に着いた。(p. 203)

に見られるように、ピロトーが、老嬢ガマルの執拗な嫌がらせに気がついて以来、ほとんど常套的に彼に冠せられる語となる。そしてちょうど先に示した *bon* の例と同じく、*l'abbé Birotteau* は、*le pauvre homme*, *le pauvre prêtre*, *le pauvre Birotteau* と書き表わされていく。もちろん、*bon* と修飾される場合もあるが、ガマル嬢の下宿を追い出されてからの後半は、*bon* が用いられる例は少なく、ほとんど全部「哀れな」という形容詞がピロトーの枕言葉のようにつけ加えられる。この神父のおかれた状態から当然のことでもあろうが、彼の人柄を示すのが *bon*、彼の境遇を示すためには *pauvre* という使いわけがされていると理解するにしても、ほとんどこの二語だけが、ピロトーを叙する際の形容詞である事実は、余り

にことがらが単純すぎて我々の興味を引く。

『トゥールの司祭』のあまり長くはない本文でも、例に示したようなビロトー神父を形容する表現は、40例近くもあるが、ごく僅かを除いて（たとえば *l'innocent Birotteau* など）、*bon* と *pauvre* につぎるのである。つまりビロトーは、『トゥールの司祭』全体を通じて一貫して「人の良い哀れな神父」のイメージを崩さないことになる。

先に明らかにしたシャブルゥ神父や、とりわけツルッペール神父が、物語の展開していくにつれて、次第に彼等の本質が露わになり、大きく我々の前にそのイメージを変えていったのに対して何という違いであろうか。しかも前二者は、その境遇、運命の変化とともに、それを納得させる形容の変化を見せたのである。ところが、ビロトーの場合、彼を取り巻く環境も、彼自身の運命も蹉跎の一途をたどるのに、冒頭の善良な姿は最後まで変わっていない。ここに《トゥールの司祭》の意味を解く鍵の一つがある。二人の神父とビロトーとの描写の落差はどこからくるのであろうか。

上の疑問に答える一つの考え方は、そこにビロトーの描写の変哲の無さを軸として、シャブルゥとツルッペールの二人を際立たせる作者の意図を見ることである。シャブルゥの影の大きさと、ツルッペールの怪物性は、善人ビロトーのイメージが変わりばえせず、卑小であればあるだけ、いっそう効果的に印象づけられるだろう。あるいは、ツルッペールの悪辣さをビロトーとの対比によって強調したとも考えられる。

しかし、それではなぜ、シャブルゥとツルッペールの二人が直接比較されることがなく、その場合には常にビロトーがもち出されるのだろうか。

故人のシャブルゥ師とビロトー助祭の間には、一方はやり手で気のきいたエゴイスト、一方は同じエゴイストでも、卒直で不器用という違いがあった。 (p. 192)

このようにビロトーと比較されるシャブルゥは、死んだ後も、ガマル嬢やツルッペール達から、ビロトーを攻撃する際の材料として、しばしば引き合いに出されることになる（たとえば199頁、213頁）。

ツルッペールとビロトーの比較に至っては、更に叙述は詳細をきわめる。

これほどの対照を示すような二つの顔つきを、この二人の神父のそれ以上に見出すことは不可能である。ツルッペールは、背が高く痩せていて、顔は黄色く胆汁色をしていた。助祭は、というと、丸ポチャと俗に言われる姿なのである… (p. 201)

こういう例の数々は、確かにビロトーという人物を一種の物差しに使う、シャブルゥ、あるいはツルッペールの尺度を明らかにする見方の根拠を与えるかも知れない。しかしビロトーが比較の対象となるのは、実はこの二人の神父に対してだけではない。『トゥールの司祭』のもう一人の重要な人物、老嬢ガマルもまたビロトーと並べて自己をもちあげる姿を作者は描いているのである。

こうした言葉に水を向けられて、いつもガマール嬢は、自分の性格の素晴らしさを、ピロトーを引き合いに出すことによって正当化するのだった。(p. 198)

老嬢が、最初まことに敬虔な信心家で、優しく世話好きの女性としてピロトーの眼に映っており、それがたちまち陰險きわまりない迫害者に変貌したことを思えば、彼女もまた二人の神父と同一線上にあるべき人物である。

そこで次のように考えることも可能であろう。つまり、ピロトーの存在は、その外貌を小説の展開とともに、巧妙、かつ急激に変化させていく人物の中にあつて、変化しないという点で逆に極めて強い印象を与える人物像として設定されているのではないか。先に述べたように三人の司祭の中で、シャブルゥもツルッペールもその人間性の変化、顕現とともに、望み通りの環境を手に入れる。ピロトーの場合は、人間性は何の変化も見せないが、彼の望む環境は、急速に下降していく。*bon* といひ *pauvre* といひ、その純朴な性格を表わす固定した形容は、彼の出会う運命が悲惨になればなるだけ、いっそう辛辣な、いっそう皮肉な調子を帯びてくることに気がつくだろう。ベルトー Ph. Berthault は、

バルザックの、「ピロトー神父」を飾りたてる歯の浮くような賞讃の下に、どれほど皮肉が隠されているか。

と述べたが⁸、確かにピロトーの人格そのものについては、その愚直を描く点において、意図的と読めるほどに、徹底した筆を用いている。なるほどツルッペールは、物語の後半から本性を表わして他の登場人物を圧する存在にはなる。しかし、作者は、彼が秘密の修道会員であったことを明らかにし、その異常な出世を、地方特有の政治的、社会的力学の中に組み込んでしまっているのである。それはシャブルゥ神父についても同じい。ところがピロトーは始終そうした力学の埒外にある。彼が「この物語の主要人物」であるゆえんは、まさにバルザックの描く、さもしい欲望が渦を巻く地方社会に生き残れない、「愚直」の殉教者である点にある。

II

ピロトーが、『トゥールの司祭』において、*bon* と *pauvre* とだけ形容される固定して発展のない人格のままに、ひとりその舞台から疎外されていく過程は、Iで明らかにした形容詞の常套化によって印象づけられるばかりではない。そうした内面と外界の不調和の軌跡は、ピロトーを取り巻く外界の周到な描出をまって、いよいよ効果的となる。神父ピロトーの生にとって、切っても切れぬ関係にあることが強調される〈火〉の叙述こそは、『トゥールの司祭』解読の更に強力な鍵であろう。

ピロトーを取り巻く〈火〉のイメージの重要さは、既に冒頭、彼のガマール嬢の下宿に帰る場面に示唆されている。

彼が思いがけぬにわか雨に降り込められて、やっとの思いで下宿にたどりつくと、呼び鈴を

押しでも返事が無い。三度も鳴らした後、やっと現われた女中のマリアンヌは、ずぶ濡れの神父を完全に火の気の絶えた彼の部屋に案内するのである。

この場面は、好人物の老神父の運命にきわめて象徴的な意味を持つ。ピロトーにとって赤々と燃える暖炉の火は、不可欠なものだからである。

それは彼自身が、

マリアンヌが私の部屋の火をつけ忘れようはずはない／あの女が火はつけるなど言ったのだ／子供でもそんなことくらい判る。〔略〕こんなことはシャブルッには全く無かったことだ。こんな責苦の中で暮していくことはできない。第一この年で…… (p. 191)

と嘆いたり、

助祭は火の気無しに起きられる人間ではなかった。 (p. 200)

とあることから明らかである。この「火の気なしにはすまない人間」というピロトーのイメージは、『トゥールの司祭』における彼の位置に、はなはだ意味深くかかわってくるように思われる。

先に引いたこの小説の冒頭数行を読み返してみよう。火のどうしても必要な神父が、かえって火のアンチテーゼである雨に打たれるところから物語は始まるのである。つまりピロトーの運命に、すでに雨が暗い影を投げかけていることになる。けれども彼自身はそのことに気がつかない。理由は、彼が念願の参事会員の椅子にありつけようだという期待が、雨の冷たさを感じさせなかったのである。

つまり、彼は参事会員の着る毛皮の小さな外套 (aumusse) にすっぽりくるまっていたので、風向きが不意に変わっても感じなかったのである。 (p. 182)

aumusse は、参事会員など高級聖職者が用いる外套で、暖かい毛皮がその身を包む。宿願の椅子を、もう半分手にしたも同然と考えたピロトーは、期待という暖かい毛皮にもくるまって、普通なら「ずいぶん雨の冷たさも感じたろうが」(p. 182)、実際は、彼は「そのにわか雨も、痛風のこともさえも考えていなかった」のである。「にわか雨も痛風も考えぬ」il ne pensait ni à l'averse, ni à la goutte という表現に注意しておこう。goutte が彼の持病の痛風を意味することはもちろんだが、同時にそれは<雨滴>の意をも内包する。にわか雨に出会わずまでは、ピロトーは水を厭う生活をしてきたのである。それは、

この人の良い僧が一番嫌がるのは、幅広の銀の留金がついた靴に、突然水がかかったり、その革底が水に浸ることであった。 (p. 181)

とあることで理解される。ピロトーは、見かけの暖かさに酔いながら、つまりまだ身につけぬ aumusse の暖かさを勝手に想像して、その実、その毛皮にしみ透ってくる雨滴に侵されていることになる。

開巻第一頁の彼の姿は、「丸々と肥った体」*embonpoint* と記されている。*embonpoint* は、もともと *en bon état* 「良い状態」を意味した。ピロトーが、先ず「良い状態」にある人物としての示唆がそこにある。にわか雨に打たれる直前までの彼は、まさしく *en bon état* にあった。長い間待ち望んでいたシャブルゥの部屋をやっと手に入れ、今、参事会員の椅子が目の前にぶらさがっているという。

彼が今申し分なく満足しているシャブルゥの部屋は、「簡素ではあるが、真赤なユトレヒト・ピロードが敷きつめて」あり (p. 186)、ピロトー自身「私の赤の客間」*mon salon rouge* と執着するものである。更に下宿とするガマール嬢の共通の客間は、「黄の客間」*le salon jaune* と呼ばれている。そこは、

掛け布は黄色で、家具も壁紙も黄色だった。金で縁取られている鏡の置かれた暖炉は、燭台とクリスタルの置時計が、目も射んばかりに燦々と光を投げかけていた。 (p. 209)

とある。いずれも俗気はあるが暖かさや光を感じさせるイメージに満ちており、とりわけピロトーの「赤の客間」の赤色は、その部屋にそそぐ彼の情熱そのものを映す感がある。つまりピロトーの僧坊でのここ半年間は、暖炉の火の常に赤々と燃える「赤の客間」と、彼のいわゆる「完璧無比の信仰の女」ガマール嬢と「つつしまやかな」ツルッペール神父を交えてお茶を楽しむ「黄の客間」で *en bon état* のうちに過ぎてきたわけである。

ピロトーの理想とするその家での生活は、シャブルゥが生前彼に得々として語った言葉にある。

考えても見給え、この十二年間というもの、まっ白の下着、白い僧服、短い白衣も、また胸飾りも、何一つ、一度だって欠けたことがない。いつもその場にきちんとあるし、数も揃っている。しかもイリスの香りがするんだ。 (pp. 187—188)

さらに彼はガマール嬢の下宿で味わう至上の幸福を「いつも暖かい火があって、食卓にはごちそうがある」*Trouver toujours bon feu, bonne table* の言葉に尽すが、ピロトーはただ「イリスの香りがする、かゝ」と讚嘆するだけである。暖かい火、ごちそう、そしてイリスの香りが、ピロトーにとって羨むべき友人の幸せの象徴であり、それはガマール嬢の家の暖い「赤の客間」、「黄の客間」において成就されるのである。

作者はシャブルゥの「イリスの香り」という言葉が、いたくピロトーを感動させたことを強調するが (p. 188)、イリスは、イリス *iris* という植物の根を粉末にした香料である。しかし、それは同時に同音、同綴りの *iris* <虹>をも意味する。

もともと彼が住いする「僧坊」*Cloître* と称せられるところは、サン・ガシアン大聖堂の北側に位置する、暗く、冷たくじめじめしたところなのである。ピロトーは、大聖堂の影にすっぽりおおわれる<僧坊>の一角に、憧れの暖かい火や光のイメージにぬくぬくと包まれていることになる。しかしそのことは、彼の幸福の条件が極めて不安定な基盤の上に成り立っていることをも意味するであろう。それは「イリスの香をかぐ」*sentant iris* がイタリックにして強

調されることから暗示されるのである。

イリスは、香料とはいいながら、せいぜい洗濯したての下着類などに香りを添えるもので、決して高級な香水の類ではない⁹。ちょうどガマル嬢が当初ピロトーの憧れのプリズムを通ると「人生に天上の香水 *céleste parfum* をふりまく」(p. 195) 美德の持主に見えた、とあるように、イリスの香りもまた、ピロトーの満喫する安楽が、実は、まことに安手のものであることを予感させるのである。さらにイリスの語が喚起する〈虹〉のイメージも、それは確かに美しい光の現象であって、ピロトーの求めるものに通ずるが、やがては天空に消える運命にある。しかも、虹は本来、光が水滴に反射して現われるものである。ピロトーの味わう幸福の影に、すでに彼の厭う水のイメージがひそんでいることがここにも示されている。そして実際にわかに降り出した雨が、彼の満足げな生活に重大な転機をもたらすのである。

すっかり雨に濡れそぼって帰宅したピロトーは、その夜に続いて翌朝も、わが部屋の暖炉に火が入っていないことに気づく。つまり彼の身に備わる火のイメージは、この雨の帰宅を境に、ぱったりと消えてしまう。そしてそのかわりに、水のイメージが、ピロトーの描写のはしばしにのぞくようになるのである。

その具体的な例を、ピロトーが階下のツルッペールに、ガマル嬢との行き違いの仲裁を依頼する場面に見ることが出来る。

ひと筋の炎が、ツルッペールの両の眼から燃え立つように思われた。ピロトーは、その彼に向って、誠意あふれる雄弁をふるって、自分が現に味わわれている絶えざる苦汁の次第を、まざまざと描いてみせるのだった。(p. 212)

ここで「味わわれている」と訳した *abreuver* という動詞は、本来大量に水を吞ませることである。あるいは水に浸す意である。ピロトーには、水に縁のある語が用いられ、それを聞くツルッペールの眼から炎が立ち昇る。このコントラストは、火のある生活を断たれたピロトーの姿を浮き彫りにするものであろう¹⁰。

ピロトーは、十日ほど下宿を離れば、ガマル嬢の憎悪の火を「消す」*éteindre* ことができると考え (p. 213)、リストメール夫人の別荘に出かけることにする。「赤の客間」や「黄の客間」のあるガマル嬢の屋敷を出ることは、すなわち、彼がますます光や火に縁あるものから遠ざかることを意味するであろう。また、*éteindre* の語が用いられるのは、ピロトーが *éteindre* する属性を帯びたことを暗示する¹¹。以後ピロトーに関する表現に、これと通ずる例が多く見出されるのである。

たとえば、ガマル嬢の代理で現われた弁護士とピロトーが掛け合う際、老練なブルボンヌ氏が、その場の成り行きを懸念して、

ピロトーの今いる立場の剣呑なことを明らかにしてやりたかった。(p. 218)

とあるところは *éclairer* の動詞が用いてある。ところが、彼の意見は、ほとんど注意をひかない。ピロトーは、さしかけられる光を受けとめられないのである。これは後にピロトーの後

押しをして思いがけぬ苦境に陥ったリストメール夫人達の場合と好対照をなす。

この喰えない老人の知恵の光 *les lumières* は、リストメール一家がはまり込んでしまった暗礁を照らし出す *éclairer* のに欠くべからざるものであった。(pp. 232-233)

先に引いた文と同じ *éclairer* の語が用いてあることに注意したい。光はリストメール家にさすがるが、老人の忠告を聞かぬピロトーには、光は届かないのである。

「赤の客間」を明け渡したピロトーは、更に「底のない井戸」*un puits sans fond* にたとえられ (p. 220), ガマール嬢の下宿とともに、彼の熱望の的であった参事会員の地位が「難破」*le naufrage* してしまう (p. 221) など、ますます、彼の水に深くかかわるイメージが強調される。こういうピロトーの、光への期待から逆に水のイメージに取り囲まれていく変化を、最も端的に、そして象徴的に語るのは、ことがすべて敗れ、頼みのリストメール夫人にも冷たく見捨てられた時¹²、彼が夫人にこぼす次の言葉であろう。

……私は通り道に捨てられたブーリエでしかありません。…… (p. 235)

ブーリエという語については、すぐ続けて作者自身の解説がある。

このトゥールの町の人々が使う言葉に見合いそうなものは、ワラの切れはし、という言葉しかない。ワラの切れはしといっても、きれいな、可愛い、黄色のピカピカ輝くようなのがあって、子供達に喜ばれるが、ブーリエというのは、色の褪せたので、泥にまみれ、小川の中を浮きつ沈みつ、強い風に吹かれては、通りすがりの人に踏みにじられるのをいうのである。(p. 235)

おそらく、物語が始まる際のピロトーは、たわわに実る麦の穂に比されるような大人物でないまでも、陽気で喜色溢れた、ちょうど黄色く輝く麦藁にたとえられただろう。物語の最後に至って、彼は小川にもてあそばされる藁屑になっているのである。その流れ着く岸は、サン・サンフォリアン *Saint-Symphorien* の僧院で、そこは、ピロトーに同情する友サロモン嬢 *Mlle Salomon* の言葉を引けば、

冷たく、じめじめとして、教区の人達は金持でないから、修復することもできない。あの可哀そうな老人は、本当にこれからお墓そのものに埋められるようなものです。(p. 242)

「冷たく、じめじめして」*froid, humide* は、そのまま水の性質であり、「墓に埋められる」*enterré dans le véritable sépulcre* の語は、ピロトーの以後の生活が、光を絶たれた冷たい死の世界同然であることを示している。実際、野望を遂げてパリに向うイアサント司教の目にとまったピロトー神父は、サン・サンフォリアンの地に、「蒼白く、痩せこけた」*pâle et maigre* 姿なのである。

開巻第一頁に登場した「丸々と肥った体」は、ここに至って無惨な変貌をとげている。身分

もまた参事会員を夢見る司祭ではもはやなく、宗務の執行をさえ停止された小教会の神父にすぎない。「善人」ピロトーの単純素朴な人格を、彼を取り巻く光（あるいは火）と水のイメージの鮮やかな転換の構図の中に描くことによって、まことに劇的な主人公に仕立てあげる作家バルザックの意図を、そこにはっきり見ることができるように思われる。

ピロトーの渴望する火のイメージが、その運命の変化とともに、アンチ・テーゼである水のそれに置きかえられる図式が明らかになった今、われわれは、容易に『ウジェニ・グランデ』*Eugénie Grandet* (1834年)のヒロインを思い起すであろう。彼女もまた、同じ光と水の構図の中に、その運命の転換が隠されていたことは、既に他の場所で示した¹⁸。神父ピロトーは、すなわち、ウジェニ・グランデにつながる『地方生活情景』のきわめて正統な主人公の一人なのである。

1980. 5. 12

Notes

1. この年の四月下旬から翌月始めにかけて、バルザックは、ベルニイ夫人と共に、Saint-Firminに滞在していた。その際執筆されたものである。同年七月十五日付母宛の手紙に「B夫人も十分判ったはずです。サン・フィルマンにいる間、頭でする仕事が多岐にわたるということ。私が『独身者達』を思いつき、想を練るのに二十日を要したのです。」(à Mme B.-F. Balzac, le 15 juillet, 1832, Balzac, *Correspondance*, éd. Roger Pierrot, tome II p. 54, Classique Garnier, 1962.) ここにいう『独身者達』*Célibataires*は、後に詳しく説くように『トゥールの司祭』の最初の題名である。
2. 『『トゥールの司祭』。一体これはこの小説の誰のことを言っているのでしょうか。つまり、トゥルベールか、ピロトーか。それともこの二者を含めたやや抽象化した意味で使われているのだろうか。[中略]従って、『トゥールの司祭』という題名は、特定の人物を指すのではなく、意味深長な地位のことを示しているのだと考えたくなるのである。』
中堂恒朗、「バルザック『トゥールの司祭』について」、『女子大文学』第十三号、p.122、昭和36年3月、大阪女子大学文学会。
また Nicole Mozet の意見は次のようである。「『トゥールの司祭』において、ピロトーは、なるほど＜主要な人物＞である。けれども、主人公としては逆の形をとったものだ。彼にあっては、その願望の対象は、獲得することができずに、ただ相続したものにすぎない。[略]この小説の結論は、明らかにツルッペールが、もしサン・ガシアン僧坊といったものより、はるかに広大な枠組みの中で形を変えて昇ってゆくことができているなら、立派な主人公になれていたことを示している。」
Nicole Mozet, “introduction” in *Comédie humaine*, tome IV, éd. Pléiade, p. 170
3. L.-F. Hoffman は、*Eros en filigrane*: “Le Curé de Tours” と題する論文で、「万事、あたかも登場人物の性的生活無きが如くに進行する。三人の司祭達は貞潔で、ガマール嬢も然り。ポリヌも同様である。リストメヌ男爵夫人は夫に先立たれている。ゾフィ・ガマールの友達も、老嬢か未亡人である。リストメール夫人の甥も独り者だ。[中略]主要人物も、副人物もいずれも配偶者もなければ愛人もない、子供も全くいないのである」と述べながら、なお、そうした＜独身者達＞を描く文体にバルザックの *érotisme* を解剖している。*L'Année balzacienne* 1967, pp. 90-91.
4. この小説の題名は、もともと *Vieille fille* と題された未定稿から始まり、結局 *Les Céli-*

bataires として1832年 Mme-Delaunay から, *Scènes de la vie privée* の第三巻に収められた。ついで1834年 Mme Charles Béchet 版 *Etudes de moeurs au XIX^e siècle* 第六巻, *Scènes de la vie de province* の一編に同じ題で入っている。

1843年, *les Célibataires* の総題で, 三つの小説をひとまとめにするとき, Nicole Mozet によれば, *Le Vicaire de Saint-Gatien, Le Vicaire de la cathédrale, L'Abbé Troubert* 等の題が考えられた挙句, 現在の *Le Curé de Tours* となったという。cf. Nicole Mozet, 'Histoire du texte', in *Comédie humaine* tome IV, éd. de la Pléiade, 1976, p. 1173.

5. Texte は, Pléiade 版 *Comédie humaine* tome IV, 1976 を用いる。Nicole Mozet の校註による。他に Club de l'Honnête homme 版 *Œuvres complètes de Balzac*, tome 6 及び M. Allem 校註 Classique Garnier, 1961 版をも参照した。

以下 *Le Curé de Tours* の本文引用はプレイアド版により, 訳文の末尾に該当頁数のみを記して, いちいち注記しない。また引用の際の圏点は断らぬ限り引用者のものである。

6. 「この物語の主要人物」*principal personnage de cette histoire* の語句は, variantes を検すれば, 初版, 再版, 三版ともに無く, 『トゥールの司祭』と題された1843年の決定稿に新たに挿入されたものである。中堂恒朗前掲論文 121 頁に「冒頭の部分に『この物語の主要人物であるピロトー師』という言葉がある。これが題名をピロトー師に結びつける根拠となっているのかもしれない。結論的には正しいことなのだが, しかし主要人物という表現だけでそういう根拠が確たるものになるかどうかは疑わしいように思える。[略]つまり題名が『トゥールの司祭』として決定的になると共に, この言葉がピロトー師の後に急ぎ付け加えられたのである。このことは, 題名がピロトー師を指していることを示すためのバルザックの配慮であると考えられる。」とある。

この挿入部分の意味や作者の意図に関しては, 『トゥールの司祭』の成立を解くうえに, なお考えるべき点があることを示唆するように思われる。が, 今さし当ってこのことに詳しく触れない。

7. フランス語原文は次のように記されている。
“... L'abbé Troubert est trop profond pour être deviné si promptement.”
8. Philippe Berthault, *Balzac*, éd. Hater, 1968, p. 172.
9. Iris について, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Larousse, 1865 の同項目に “L'iris germanique, iris commun, iris d'Allemagne, vulgairement nommé flambe ou flamme, est une plante à feuilles courbées en faux, engainantes, glabres, plus courtes que la tige, qui est multiflore. Les fleurs sont violettes; (...) Frais, son odeur est vireuse et désagréable; sec, il est au contraire pourvu d'une faible odeur de violette qui l'a fait employer pour parfumer le linge.”
とある。Iris が「炎」の意をも, その語源において含むことは興味あることである。
10. ピロトーを前にして眼から炎が立つのは, ツルッベールの場合に限らない。ガマール嬢に自己の家具を持ち出す交渉を切り出すピロトーに投げかける老嬢の眼からも全く同様の炎が輝くのである
「……ピロトーは, 老嬢に会釈をして語りかけたが, その唇に浮べられた辛辣な嘲けりの笑いにも, その眼に, 虎の爛々とした眼光そのものの異常な炎が輝くのものにも気がつかなかった。」(p. 222)
また, ツルッベールと同じように, 「ガマール嬢は, 急に大きくなったように思われ, 彼女の眼は, さらにぎらぎら輝くようになった。」(p. 223) と書かれている。
11. éteindre の語は, さらに, ブウルボンヌ氏が, ピロトーに忠告する台詞にも使われている。「……しかし, あなたにとっても, 我々にとっても, まずガマール嬢に対するあなたの訴訟を消滅 éteindre させなくてはなりません。」(p. 234)
12. この時, 彼は「自分が, 深淵の縁 *sur le bord d'un abîme* にいる」ことを知って慄然と

する (p. 234) のだが, *abime* も又, ピロトーが水のイメージに沈むことを示す言葉である。

13. 拙稿「*Engénie Grandet* における *lumière*」,『フランス語フランス文学研究』No. 35, 1979, pp. 24-35. なお, *Eugénie Grandet* の舞台は *Saumur* であるが, たとえば, *Père Grandet* のモデルは *Tours* の某であるという考証 (cf. P-G-Castex, Garnier 版 'Introduction') もあり, また *Mlle Gamard* のモデルも, そのアパルトマンも *Tours* にあるという (cf. S. Bérard, 《Encore la maison du *Curé de Tours*》 *L'Année balzacienne* 1968) から, 執筆年代もさほど隔っていない両者に共通する創作動機というものはあっただろう。しかし, 重要なことは, *Tours* に登場人物のモデルらしきものがいたことではなく, これらの主人公を描く作者の内的照応である。

原稿受理 1980年5月12日

Le “principal personnage” du *Curé de Tours*

Takao Kashiwagi

Parmi les trois religieux du *Curé de Tours*, Birotteau, Chapeloud et Troubert, lequel est effectivement le “principal personnage” de ce roman? Cette question peut paraître absurde pour ceux qui rencontrent, dès les premières lignes du début de ce livre, cette expression-ci: “... l'abbé Birotteau, principal personnage de cette histoire”. Mais le caractère de l'abbé Troubert, l'ami de Birotteau, nous suggère que Troubert pourrait être le véritable héros de cette histoire. Car, ce personnage grandit jusqu'à “avoir les dimensions d'une pyramide d'Egypte” à la fin de l'œuvre. Chapeloud, lui aussi, il pourrait être considéré comme un homme important dans les coulisses de la tragédie de Birotteau.

Pour éclaircir cette question, nous analysons d'abord les épithètes utilisées pour décrire les trois curés. Il en résulte que les adjectifs employés dans la description de Birotteau sont presque toujours les mêmes, à savoir: “bon” ou “pauvre” malgré la décadence rapide de son destin, tandis que ceux des deux autres abbés changent graduellement à mesure qu'ils montent dans l'échelle sociale, du simple curé jusqu'au chanoine ou à l'archevêque dans l'étroite société provinciale. Cette différence de l'expression du sort entre Birotteau et les autres est très significative. La monotonie de l'emploi des épithètes pour le premier n'attire-t-elle pas ainsi, paradoxalement, notre attention sur lui?

L'intention de l'auteur de concentrer l'intérêt du lecteur sur Birotteau sera renforcée par ce fait que les images de lumière autour de Birotteau diminuent remarquablement, suivant la décadence de son destin. Birotteau abhorre la pluie, l'humidité, et il désire ardemment le feu ou la lumière, comme le montre l'anecdote de son retour à la maison de Mlle Gamard sous l'averse. Le développement de l'histoire, cependant, nous révèle que Birotteau devient, malgré lui, de plus en plus étranger aux images de lumière et qu'il se trempe dans celles de l'eau à la fin de ce roman.

Cette analyse du texte nous rappelle Eugénie Grandet, dont la vie est adroitement tracée avec la transition des images de lumière à celles de l'eau comme nous l'avons déjà démontré dans un autre article. Birotteau est donc bien ainsi un des principaux personnages des *Scènes de la vie de province*.